

腕振り運動による治療原理

岡 英 男

連環易筋経は1500年も昔の文献であるから、西洋医学の発達以前であって、これによって説明することは無理である。東洋医学の歴史は古いにしても、最近まで筆者には理解できなかった。1999年に入って漸く二つの文献の力を借りてある程度の解釈ができるようになった。

その一つは、インド生まれ、アメリカで永年医者をしている Deepak Chopra 著 (1991) クォンタム・ヘルスである。その第1ページに「あらゆる人の内側に、病気もなく、痛みを感じることも年をとることも、死ぬこともないところがある。」と書いてある。また、同じ本の16～17ページには、体内の臓腑が3週間て新しく変わり、胃の内壁は5日で、皮膚は5週間で、骨は3ヶ月で、体全体の細胞の98%が1年で入れ変わる、という。これはカリフォルニアのオークリッジ研究所で放射性同位元素を使って確認された。こんなに新しくなるのに、どうして老化という現象があるのであろうか？

これを説明してくれるのが第二の文献、カナダの H. Govindan 著 (1991) "Babaji" である。この本の151ページに、クリア・ヨガの「逆比例の法則」ということが述べられていて、人間の寿命は1分間の呼吸数に反比例する、とある。例えば、1分間の呼吸が15回なら、120才まで、30回なら60才までとなる。その理由は、1回呼吸することによって prana が失われて行くためであるという。プラナは気功などでも知られているが、サンスクリット語で、生命を支える宇宙エネルギーを含む微細な粒子である。多分10⁻¹⁰m 程度のものであろう。もちろん不可視である。だから、老化ということは、物理的なものでなく、プラナの減少ということである。これが残留していれば、ガンの細胞の増殖もおさえることができる。腕振りでガンが治るという以上、プラナの減少を防ぐだけでなく、プラナを創生する手段が必要である。腕振りの場合、両方の掌の面は平行に保つ必要がある。このとき、掌の面と垂直に、右手より陽、左手より陰のプラナ・ビームが出る。このビームが足の血管を切るとき、多分血液の白血球にプラナを創生すると仮定すれば効果の説明がつく。血液は体のどの部分にも行き渡るのだから、連環大師の言うように、万病を治すことになるのではなかろうか？

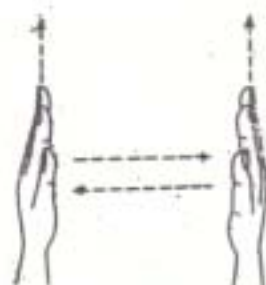
もう一つの効果として考えられるのは、腕を強く振ることが円運動の遠心力となり、足の下部圧力を及ぼすことによって散歩と類似の効果もあり、足部血管の弁作用によって、心臓の負担を軽減するということもある。原文に書いてあるような多数の回数を実施するにはかなりの辛抱が必要ではあるが、獲得できる効果の大きさを考えると、実行の価値を無視することはできない。

以上の考察に加えて、ガン細胞の抵抗と、プラナの攻撃力を数値的に検討することも考慮中であるが、別の機会に譲ることしたい。

参考文献

Deepak Chopra (1991): クォンタム・ヘルス、原田 登久訳、高橋 和巳、小山 克明監訳 (株) 春秋社。原著 Perfect Health, 1990 New York.

H. Govindan (1991): BABAJI and the 18 Siddha Kriya Yoga Tradition, Kria Yoga Publications, Montreal, Quebec, Canada.



左右対向